

20周年記念
特別寄稿 1

保存会結成20周年に寄せて

増野 肇^{ましの はじめ}（保存会・前会長、ルーテル学院大学名誉教授）

高良武久先生が森田療法を専門に行っていた高良興生院の跡地に就労センター「街」が活動を開始して20年がたった。その際、「街」の図書室を拠点として組織されたのが「高良武久・森田療法関連資料保存会」である。常盤台病院で森田療法を実践されていた藤田千尋先生を会長として、高良興生院で森田療法を学んだ先生たちが集まって、結成された。

慈恵の先生方や岡本記念財団の協力のもとに、高良興生院の資料の保存と、森田療法の教育を続けてきた存在としての啓発的な仕事を行ってきたのである。

5年後に、一応の使命は終えたとして会は終了したのだが、存続を望む声が多かったので、事務局を担当していた私が後を引き継ぐことになった。その時に名称も「高良興生院・森田療法関連資料保存会」と変えた。高良先生の弟子たちの個人的なレベルから、森田療法そのものに重点を置いたのである。そして、15年が経過した今、会長も、高良興生院を原点とされている市川光洋先生に引き継がれて今日に至っている。

この20年間に何をやって来たのかを振り返ってみたい。毎年総会には、何かしら新しい企画が登場した。足立美知子さんを中心とした事務局がとても積極的で、高良先生の墓参を続けた後、三島の森田病院の見学、根津の森田先生の自宅を訪ね歩く、高良先生が愛されていた真鶴のご自宅の訪問、藤田先生が森田療法に取り組んでこられた常盤台病院の見学等々、外に出て歩きまわったことが貴重だった。また、藤田先生が亡くなられた時に行われた偲ぶ会も、森田先生を介護されていた瀬戸さんの亡くなられた時の偲ぶ会なども忘れられない。

これらは、事務局の人たちの自発性によるもので、

そもそもの始まりでお世話になった浅海捷司さんから始まり、岩田、足立、吉田、藤田、内野さんたちの自発性にあふれた会議が熱心に行われ、総会をはじめとするさまざまな企画を生み出していた。この中には、「常盤台神経科」を製作された野中剛さんの協力も忘れてはいけない。

秋に行われる森田療法関連の講演会も、最初は医師が中心だったが、いろいろな案が登場して多くの参加者を魅了した。「べてるの家」の向谷地生良さん^{むかいやち いくよし}をお呼びしたことも忘れられない。

私としては、個人的に応援していたロシアのセミノヴァさんを招いて、ロシアの話をしていただいたのが忘れられない。

これらの事務局の自発性に支えられた様々な企画に比べると、私自身は専門のサイコドラマをさせていただいた感謝ぐらいしかないが、その中で、高良先生時代の「水曜日懇話会」を復活させて、独自の話し合いの場を作ったことが良かったかなと思っている。

ただ、私自身の歩行障害がひどくなり、夜の外出が難しくなって会長を交代したのであるが、それはマイナスな事でもあるが、そのことが、事務局の自発性を刺激して、新しい企画がいろいろと生まれてきていることも事実である。そこに、このグループの力を感している。

「かがやき会」の30年史でも書いたが、高田の馬場の拠点である「池田会館」でザーカ・モレノから教わったサイコドラマを実践していた時に、高良先生がおいでになって、自分が亡き後、この土地を活用してほしいと外口氏と話し合われた時に感じた興奮を今でも忘れられない。森田療法のメッカだった高良興生院が精神障害者の就労センターとして再出

発をするという話に、新しい世界の始まりを感じたからである。それを具体的に、あの素敵な建物の形で実現されたのが外口玉子氏なのである。

しかし、その時代の人たちはいつまでも元気でいる事は出来ない。私だけでなく、多くの方が現役から退かされている。この組織を支えてきた岡本財団も息子さんの世代になっている。

このような変化の中で、何を基本にして、何を示していくかは、新しい人たちの課題である。市川先生は森田療法を愛し、その重要性をしっかりと持たれている。意欲的な事務局もそれを支えて活動している。これらの方が作る未来を期待して、見守りたいと思っている。



20周年記念 特別寄稿 2

高良興生院と就労センター「街」

とぐち たまこ
外口 玉子 (社会福祉法人かがやき会理事長)

私が高良興生院に伺って、高良武久先生とお会いしたのは、25年余り前のことでした。

妙正寺川沿いの、小道に面し、うっそうと生い茂る樹々の緑に包まれて建つ平屋造りの診療棟や広い厨房などが、つい先頃まで、森田療法の実践の場に育まれていた静ひつな雰囲気は保たれ続けていたからでしょうか、どこか懐かしさを覚えるたたずまいにありました。

高良留美子さんの案内で、種々の庭木や草花が自然のままに息づいている広い庭を踏み分けていった先に、先生の待つ平屋建てに木の香りの漂う書齋がありました。高良真木さん、留美子さん姉妹を交え、この、高良興生院の歴史が刻まれている場所をどのように活かしたいかに向けて、語り合ったのでした。

先生は画家である真木さん、詩人である留美子さんの個性溢れるお二方のやりとりを決してさえぎるようなことはせず、じっと耳を傾けておられ、その姿は、同席していた私には、かつて診療の場でそうであつたらう先生を想像させるに十分な印象深いものでした。そこで、私は促されて、数年前に精神障害者とその家族などと共に有志で立ち上げた「地域の中の、集い支え合う場づくり」の経緯と、そこにこめた思いを語りました。従来の隔離された病院や施設ではなく、普通の生活の場で一人ひとりが自分らしく生きる空間や時間の使い方を保障され、生活の中での気づきや発見が確かめ合われ、自分を取り戻し、回復する力としていくための“相互支援・相互学習の場”を地域にひらかれた形で創っ

ていきたい……などと、新しく試み始めた当初の意気込みをそのままに、お話をしたように思います。そして先生は、折を見て、私たちのところを是非訪ねてみたい旨の約束をされました。

それからしばらくして、暑い夏の陽射しが照りつける中を、先生は真木・留美子姉妹と、かつて高良興生院の婦長であった森口さんとを連れ立って、高田馬場の私たちの「地域ケア福祉センター池田会館」に足を運ばれ、ときにうなずきながら丁寧に見て廻られました。

説明の多くを求めることはなさらず、私たちの“生活する中の回復”をめざした試みの現場に立たれたことによって、先生はそこで紡ぎだされている何かしら共通する通じ合うものを受けとめて下さっていたのでしょうか。言葉少なでしたが、「このようにして使ってもらえるといい」と柔らかな言い方でつぶやくようにしておっしゃっていました。

先生が亡くなられたのち、留美子さんから高良興生院跡地の一部の寄贈を法人である私たちがかがやき会が受けることになったとき、改めてその地で培われてきた文化ともいえるべきものを大事にしたい、そこで貫かれてきた理念を引き継いでいく責任を感じ、たとえ、形は変わってもそこで育まれてきていた価値をいかし得る空間を創り上げていきたいと身の引きしまる思いでした。

そして、2000年に、桜・櫟・スダジイなどの樹木をいかし、地域の人に喜ばれるおしゃれなカフェをつくり、パン工房も備えて、当時は新宿区では初めて「精神保健法」に基づく働く場として、就労セ

ンター「街」を出発させることができました。障害者が働く場が、地域の人たちを迎え、もてなす場となる。そこは地域の憩いの場となって、さまざまな人の交流を生み、生活感がもちこまれてくる。それによって互いの経験の広がりをもたらされ、相互理解を深め合い、共生の地域社会づくりに向けて主体的に参画する一歩を踏み出したのです。

2階には図書資料室を設け、「あるがまま文庫」と名づけて高良興生院・森田療法関連の図書資料を閲覧可能にし、地域にひらかれた場で常時の展示をしています。

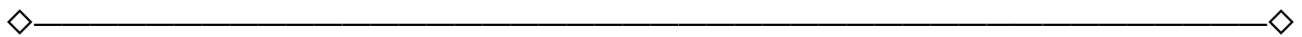
高良興生院での臨床経験をもつ先生をはじめ、関心をもたれる方々との交流の機会にも恵まれています。また、保存会事務や関係資料の整備、来訪者の受付や対応などを就労センター「街」の通所者たちの仕事として位置づけました。また、保存会の事務局が置かれたことにより、足立さんをはじめ、事務局スタッフの尽力を得て巾広い活動に向けた窓口となって、私たち就労センター「街」との協働のしくみが生みだされています。

3階の研修室では、保存会主催の「精神保健連続講座」が定期的に関われ、とくに増野先生の「サイ

コドラマ」や「講話」は、先生のゼミナールの学生たちをはじめ、多くの関係者や学生や市民、そして通所者たちにとっての学びの場になって続けられています。

高良興生院OBの方々も加わっているセルフヘルプグループとしての「生活の発見会」の存在もまた、当事者の体験を表現する冊子発行や体験の語りなどの機会や場を提供する活動が、ずっと以前から大切に続けられてきていることは、当事者の主体づくりをめざしている私たちにとって学ぶものが多くあります。

保存会の20周年を迎えるにあたって、改めて高良興生院ゆかりの方々との貴重な出会いとその深い知見にふれることのできましたことに、心より感謝致します。これからも皆さま方とのかけがえのない交流を大事にしながら、私たち就労センター「街」の取り組みをより豊かなものにできるよう、地域の中の学び合い、支え合いの場を皆さま方と一緒に実りあるものに育てて参りたく願っています。



2018年 秋の心の健康講座のご報告

高良興生院・森田療法関連資料保存会 事務局長 ^{あだち}足立 ^{みちこ}美知子

保存会主催の「秋の心の健康講座」を昨年秋に3回シリーズで行いました。

1回目は、『**もの忘れと認知症と森田療法**』の題で繁田雅弘先生（東京慈恵会医科大学精神医学講座主任教授）にお話を伺いました。

◇**繁田先生のお話**から——認知症になっても記憶力の低下はあるものの感情やその他の機能は、それほど変わらない。周りの支援を受けながら、今までどおりその人らしく暮らしていける。医療・福祉の専門職は本人の可能性を誰よりも信じなければならない。——

先生のお話が優しく心に届きました。参加者は37名でした。

2回目は、『**仕事のメンタルヘルス**』—就活から退職後まで—の題で市川光洋先生（飯田橋光洋クリニック院長、保存会会長）にお話を伺いました。

◇**市川先生のお話**から——症状だけ治しても解決にはならない。その人の働いている場面や、どんな生活をしているのが治療の鍵になる。不安をひとりで抱えないで、ドクターと一緒に共有し考えていくことが大事である。——

参加者は24名でした。

3回目は、『**児童精神科臨床からみた子育て・親子関係・家族についての雑感**』の題で松本英夫先生（東海大学医学部専門診療学系精神科学教授）にお話を伺いました。

◇松本先生のお話から——子どもは皆、生まれてきてくれてありがたいの存在である。「あなたは、あなたのままで大事な存在なのだよ」という親からのメッセージが子どもに伝わっているかどうか。真剣に悩み、悩みながら自分の在り方を見つけていこう。

先生から生きる上で大事なことを教えていただきました。31名の参加でした。

これからも心の健康について、皆様と一緒に考えていきたいと思っています。

◆お知らせ◆

1. 総会

5月19日（日）に「街」にて開催予定です。
今回は保存会結成20周年を記念して、講演と座談会があります。（※要・申込み）

①講演；保存会結成20周年、今あらためて語る「高良興生院と森田療法」

講師：近藤 喬一（精神科医、元・大正大学教授）

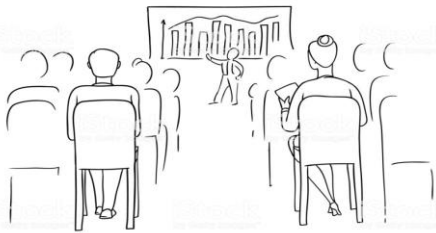
②座談会（いずれも精神科医）

阿部 亨（元・高良興生院院長）

近藤 喬一（元・大正大学教授）

増野 肇（ルーテル学院大学名誉教授）

丸山 晋（元・ルーテル学院大学教授）



2. 水曜講話の変更

増野肇先生が行って来た水曜講話は、今年4月から毎月第2水曜日に行なうことになりました。時間は11時開始と変更されておりますので、ご注意願います。

なお、昼食（1階で一緒にランチ）後、1時半から「サイコドラマ」の講座が行なわれます。

* 保存会主催「水曜講話」11:00～12:30

参加費：1,000円（保存会会員は無料）

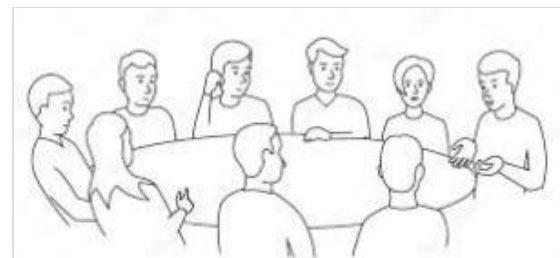
* 増野式サイコドラマ研究所主催

「増野式サイコドラマ・オープングループ」

13:30～15:30

参加費；2,000円（保存会会員1,000円、

当事者割引500円）



■編集／発行 高良興生院・森田療法関連資料保存会

◇連絡先 〒161-0032 東京都新宿区中落合1-6-21 就労センター「街」内

☎03-3952-9975 ただし、火・水・金曜日の10時から17時まで。

◇電子メール info@hozokai.net

◇ホームページ <http://www.hozokai.net/> ※最新の講演情報などをご案内しております。